太田道灌雄飛孫　五

へ13
3915
5

門へ13
號3915
巻5

早稲田大学図書

太田道灌雄飛録巻之五

目録

一 景春同意の者蜂起附り道灌平らの城を攻落す
一 豊島重員の所方へ属し附り道灌武州浅草ゲ原軍のこと
一 道灌武州江古田軍附り敵兵敗軍のこと
一 景春上杉勢と武州用土原軍附り道灌謀を以て破ること
一 長尾景忠の所方へ降参のこと
一 古上杉兵と北武蔵對陣附り成氏上杉と和平のこと

大正十年八月廿九日
本大學出版部購

一道灌武州小机軍附り景春敗軍の事

一道灌相州奥三保軍附り海老名弁間討死の事

一道灌東武巡見并小日向金剛寺市谷八幡宮の事

附り山吹の里の事

太田道灌雄飛録巻之五

東都　木村梅年忠貞編緝

○景春同意の者蜂起附り道灌諸城を攻落す事

ゆるぎどふも尾系同意の一味の輩所々に蜂起し、くよ秋を立さんと。先武蔵国豊嶋郡の須人号鴻助解由左衛門尉。同子平右衛門尉八同郡石神井。深馬の城を築き在土と川越の通路を塞ぐ。其勢七百餘騎。せて楯ごもる。相州糸系もぐ[illegible]の前溝呂木の城より倚く要害成かまへ。武蔵後のみ寄所寄へ小城乃上城より[illegible]を掃郡助く小沢の城小[illegible]の城集りて。武蔵相模の一ツの私[illegible]ありみるが。方面へ通道塞此由と聞て。[illegible]ひ一半[illegible]も[illegible]る。乱色も形く。扇を[illegible]中遣ハして軍勢を招て。手代田系[illegible]を城に残し。[illegible]田深八郎。齋藤加賀守を先陣として溝呂木の城小攻かゝる。城主[illegible]

と防ぎ戦ふ。あるは太田道灌自ら出で進退強引自在に攻め寄せ、
たちまち塀柵乗破れば、接ぎ合ふ落城疾風の如くなり。
小磯の要害よりみ寄せて、四方より攻め寄せ、敵も流石に無勢
猛えしぶ。これもかなわじと城を捨て入て城を守る。大将の命令に陣参を。道灌
人馬の疲労を憩ひ。又小沢の城へ向かんとす。中ほど此所に究竟の休場にて。
弱の足を自在にしぶ。金子掃部助の武勇の古兵すりなべて民屋を毀
く櫓をちらし塀を塗大木大石橋を敷く。遅遅として待うける。道灌報
時河越の城中へ。太田道書助。上田上野介びに松山氏を命ぜ。往生出来上枝
開ける小浦朝昌。三浦介義同。千葉二郎自胤。千代田ヶ加勢として命ぜ。
小沢を来るべく巡見し。此城を攻るあまたの兵士多く損ずべし。先其境を
を避て遠巻にせんと味方の中に遠く向ひ陣をぞ立てうける。残る小泉

ちかく一味の者在里宮内左衛門。宝相寺と始めとして。小沢の城の後詰乃左矢。
横山より出て出国府中に陣を張り。小山田の城を攻めて矢野兵庫助
を大将として。この城の城を押えんと。両様とりの所に出張をとこれをとりて。この城
乃塀をこうりうる。太田図書助資忠。上田上野介宗弘。ちらさんと出る。矢野
兵庫助。小机のものどもと一度に戦ふ。猛勇とりの所に出て其備性
一重あり。太田上田の二度とも出て先陣をうひ。央の須。横浜に入て突
崩さんとす。上田上野介三百騎。敵の手強すぎて敵うれば。矢野も精兵の射手
を抜へ。さんざに射ける。上田は態と弱くと命令一丁ばかり退けば。矢野兵
庫助。軍勢ども備を乱して追来る。時分はよしと二陣に控へ太田図書
助。敵陣の弓の方より五二番三番突て入る。上田も併あはして返し合せた
右より矢を入れば矢を射る。高峯度をしまひ。狼狽強くぐと。太田上田八方より

引負て一人も漏さじとあくまで勇める矢野弓庵助。ふ机の
輩もつゞき出て戦ふ。くの辨わく引退く。吉田上野ひけ道渡へ遁
又川越へ帰陣す。

○豊嶋重員清方へ属す附り道渡武及浅茅が糸軍の事

豊嶋又武蔵の豪族の住人。豊嶋彦太郎重員と云人者あり。彼八平氏の
一族中〻く。源義朝代より名代の弱ゝして人も知る勇士なり。代〻扇が谷ふ
ちさびて世二の味方なるに。古の清盛ゝ清方と云ゝ。ふ定正と背き清方方と形り。
茅云を寵ひ清方勢を引出さんとするゝ。
其事聞て彼ゝ驚きれて。道渡変て我が居城近き小敵続をさ〻ぶべき
由ひらぶとく。小沢の城ふ押えを強し。ゝ一戦ゝ事なるべしと。七百余騎を
従へく真剣山ふ出張と。吉田彦太郎重員も一族郎従百余人ともも

同じく浅茅が原へと向ふ。吉田道渡ハ敵兵思ひの外小勢なりと斥
候の者ゝ申ゝ平塚へ出〻追ふ迫く対ふと搦手の
敵付ふ旗を立ゝ。続士揚て七百余騎。香象の滝を衝く大海
を渡るごとく平地ふ馳りる道渡魔と振く下知まれば。兵士猛虎の勇戦
あ〻吉田ゝ勢ゝ突てへふ。吉田ゝ勢も負ふ命重員も自ら先ふ進く。敵勢を励ま
力戦と。元来牧文の戦場ふ後ゝ。ゝ名ゝぐる吉田ゝ勇ゝ。良ゝを伴きく
搦手ふ。重員ゝ猛武者ども。ゝ地ふ知ゝ。ゝ麻濃の方へ迫退く。重
員ハ歯噛をふ〻ひ甲斐なき者どもゝ。ゝ敵ゝを遁ゝ。ゝ食ハ限ゝある
りのゝと大きふ怒り。逃る迫方ゝ目もかけず。家のゝ優代の帝業ゝとるの左右
ふ知ゝ。ゝ備ふ中軍ふ馳へと。吉田入道ふ徳ん。ゝ切ゝども刺ゝ。ゝ刺ゝ。
ゝ〻ゝく進ゝ来る。ゝ吉田源八帝ハ此形勢を見るゝ。ゝ一文字

まゆみて。わづらしや考へ給へ。重貞完爾とあつらへ。
日ごろの明友今日の又義の命ぞ修羅の敵ごさんなまと切むまぶ。考へるが良勢
い世ふ彼堂に隔てくれ。主貞ふ続く味方もなくざれども。考へあしと涙八命八
よ底ひ時とあくうつよ。両側ありいざ細んと考へをかくまとて投捨て池むと
ちくくくくと忽よもるぶ頃よどうど嘉つ。考へ侍ハ笑ゆる勇士あまども。我ハ労
きくうくあれば。涙八命ふ迫ちれ絶よ討死くうう考へ。大将已ふ如見あれど。
殘るあども或ハ捨ぶ或ハ落夫世沙乗も初ふとおりきれば。道灌則考へ主
貪へを始めとくと。討死る首数八十九級。上の寄ふかけきう。後関紙数沙
ひ往土へ凱陣しきりきふ

○道灌武州江富合戦附り考へ赤塚板橋等の戦軍の事

ちくくくと毛尾家まちぐうめふかくくいまくくと考へ赤解由左衛門主貞同弟平

太田道灌雅飛録巻之五　四

太郎左衛門尉の家の人数千騎ふハ
族おりぶ渠ハ伊勢方と成ぶくくのふ。其ハ合戦ゆも生命ぞとして最ちうしふ。
主貞の命ぞ戦死と主人命よおりひ平左衛門ハ考へ殿平塚ふ城を築こめる
合戦の用意をふまを。同ハ月十三日道灌往土へ行く出。平塚の城ふ攻ふの
せく城外と放火して陣ハ考へ殿。平左衛門おりハ考へ道灌一人退きくハ。
て妻勢を以率くくんとまるの事ふるべくく。兄弟家臣左衛門ふ加勢の事
と杉みくくぶ重廣用屈て石神井。練るハ兵士ハ絶ハ板橋赤塚の一族残
ちよりて其勢七百余騎ゆくうち出ぶう。平左衛門尉重ハも三百余騎を以
率くくふ勢力ゆ加ハりるぶ田入道これを聞て。よ扶刑部少輔朝昌千葉ふ
自滅と左右よ待ハ用邪江富の系沼代仲とのハ邪向ハ勢千騎ふハ
見ちぐうきう。その日ハ暮よおりひ合戦ふ明日と。互よ陣所ハ角戦

楚ごさ夜見り居る番卒怠らざりかくて明れバ十七日の早天に両陣閧をどつと挙し。
矢合せの鏑矢を射ちがふる程こそあれ。金鼓を鳴らし喚てかゝりてた
ゝかふうぢ勢の面々戦ひ疲れて二陣に譲りて颯と引けバ太田が先陣上
杉も千葉に後れじと一勢ある互に荒手の軍兵ども手先を争ひ揉に揉で破鬼こ
声を揚げ責めかゝれバ時分はよしと太田道灌采配を振りて勢のく先刻より
待かね居たる足軽得をのくぞと引提げて。板橋赤塚が郭伍に切てかゝる敵兵ハ千
葉が勇士に攻立てられ一度に崩れ立て其の處へ太田が旗本おし寄れバ備いろ
めき崩れたり。味方は勝に乗じて二陣破れしが其のまゝ再び返さんと朝
あれける板橋赤塚親討をあし大音に下知しながら。中々も豊島平右衛門
も。泥革の鎧に白星の冑を着て三尺ばかりある陣刀を真甲にかざし。
一去刀あてへ跡落させふり返りて丁と切る其形勢唯霹靂の閃くが如く。

されるうちに死人ハ知らず十七人まで打おとせしかども猶勇む自流が若卒ども。
各人々を備をなして陣中向けてかゝりける。其勢自流ハ大に怒り敵一人乃爲
に射らく悩まされ未多くへあるので自流が討死まで防戦してせんどと乱入せんと
する処へ○○の者ども郎党園城寺藤三郎真純自流が弟若党に駈出て十文字の鎗伏
りたり矢を受て大に切り立たれ。平太夫が胸板に黒巻せ矢に射とほされて
るより下へどうど落つ。真純が供の者首取切とりしより。其家の苗之大將を
討れしを見て。討死せるにぞ。太田ハ尚も士卒を励まし後に続て退
討せ。板橋赤塚の面々の者も所々にて返し合せ味方を落さんとせし程に
無彼不めて討死さ太田へのちに三軍を纏め討たる者の多かれバ其余
赤塚板橋の頼かにして。百余人とぞ記したり。其夜ハ人々を休息させ
二日十余日石神井の陣にあしまして。各二手三手より攻かゝる。明日の気力

屋にて行くも皆蔵に付くれば防ぐべき術もなく降とりひて同十八日に出城
、こく対面を遂げ武要害を破却せんと中とりこどもに国こへ山坂甚だ容易
異心を懐くと聞く。同日たちまち攻おとし給。武蔵中を平門重廣る
後度の行ちや役人。公の家とも落参せてス。

○景春上杉勢と武州用土原軍所の道灌陣系を破る事

扨又金子掃部助ら義重さる小澤の城へ先日押えの兵を引こしの此
勢へ小攻落甚だ同月の末より杉と共に後へ小沢の城へぞ向ひる金子
掃部助忠色々の勢を引具し城中ちろ出くひ。西の陣先
少くこく一まつさとり退く然とりこども道灌へ引く城攻ろ
一城より出ぬ。指南行事とおつる養ふ城へ堅固に後程
ちと一と今みへ接けの色もなく。猶未とも安くねへ久しく能城なりこちく

或夜忍び出小義夫ちを田へ入給へ敵を
一方を明渡く歳しくも退へぐちろ。
ちろ五人。敵ちろ上列勢を偽して武蔵五十子梅沢とい新
押出て陣をとるすると田へ遣乃屋へ向へ新の敵を成へ行先陣
新の城を攻出して上杉那波の方へ引て。なを上杉を追へ文明九年
八月三日利根川を渡り後ろ。敵と戦うとへ十子の沼沢甘一ばくこ
武平の大軍と共尾へ出て相ち敵追ひて陣をとれば上杉
へ田へ遣乃屋へ遣乃屋へ忠系松金子懐る大軍行ちるこ
越る三万源持一陣をく用を命へぞ寄ちる赤尾宮部乃陣
風三方遣のる上田兵庫助をるよりへ。今まと上杉大軍へ行て出兵の上田
へ乃ち行番へ戦うんと合戦頗難ぞあるべ上杉の陣へ三人戦ちく和

武州浅茅ヶ
原の合戦
豊島彦五郎
重員室田
源八郎と
組打之図

さしよう。敵方の人ふ超えて。先へ進むを好まるれば。上杉をぞる弘敵ら。その
隙なく敵の道造一人なり。先鋒級軍〳〵く崩れかゝらば。道造も列伍
乱れていんともする事あらば。大軍の靡きなる敵なれば。多年號令
を用ひざりて陣中混雑せん事。明白なるべ。実てへるその
あらば。勝利を得ん事疑なくうちなるべきと。三戸。上田紙左右ふ行人自強る
孔道。紙ちさぐ。只一揉よ敵ちらさんと。長く紙そろくく驀直ふすてをる。
通道の身當るの先陣あるしるば。長兆今多人系長紙討ちんとるを見て。
此所へ寄せるとなる。齊藤加賀守と宮田源八郎ふ百余騎を隊て。近村ふ張一
ぬさ合戦の頃ふちち出ると。〳〵合せ。板倉美濃を呼ぶ。ナ多人。足下ハ
よ敗家の雑徒とさて。先へ進ゝ〳〵ぞと弱くと舎る新ひ。敵を覆ひかゝらば備
をよく退るもよ。本陣の見を離を聞ば一度よ敗くく逐〳〵伏兵と一ふふ

て切崩さべしと命じ。我が備ハ両上杉の先へ繰出して。板倉が後二丁ばかり引
下がるべく指図を。時ふ文明十年戊戌五月十日。梅雨の天ふ〳〵霧て。雲間茂
濃ろ〳〵朝陽のほがらふとそ〳〵出〳〵。長尾景春が先隊三戸上田の為ハ今
板倉美濃守が上杉の雑を。さて。繰出を見るとも行ふ。ふ〳〵も撥義を
厚紙。家配紙ふ振りてかゝるとく〳〵下紙さんを。ホ尾が敵軍一同よ板倉が備
よ切く驚る。兵法なるも。先て少時が間ふ〳〵とええるが忽よ追ふら五二陣ハ
方へ逃れかゝ山ホ尾景春と。をえく。されべこそ上杉の先陣ハ破れさ。此間を逐
さと旗本よ衝くべ。上杉の敗ハ討ちと主軍を下知〳〵板倉が後ふ迫て退ぞく。
道造ハ先切ふ見物〳〵居らしが。家ちが兵ふ乱ふ伏ちの渇をとうとふと
入ると〳〵〳〵。倉間の狼烟紙よ〳〵〳〵る。ハ煙傳〳〵と雲〳〵の中ふ〳〵。ちのれ
ば時ふ我ふもと。愛因齋藤。二ふふられて糸ちが行を切りあてをる。おのひも

うけね事なまじ。も尾ダ軍幸国章一て。しろよ敵あろ一返せといはうちゆ。
あよ扶ハ扶金ゆ旋幟をうて臭べ。きゆ敵をかてべ。扶金臭法をたりの方。
宝田秋茂ハ右乃方ろう。系長紙引包ゆ被急急よ責ろる。系長ハ扶ハ例のへ
道あゆ諸よ乗ろ一れろ。後陣ろう。ごんくゆ退けとく人数を翔んとあせ一ども。
前後四方よ敵を猜。郎伍乱れ。くゆ我ゑんとするのあく。悪く駁軍を。系長
ゆをろるろも今ハ運の究ろう。けゆ少く付ゆ先んと身結ひとる其の玉。系長
三戸大日一ハゆろて系ろ。ころ此穂乗よゆろう。当ゆハ某と名庫助ゆ
仕ゆ一れ早く鉢形へ四川元方べ一と。系長系動ゆつ踏ちゆまりて敵を防ぐ。
上田云庫助も某よろうて延ろう。ゆ踏ゆるゆ勢後よゆ四くだろ。まも
多くハゆ一員ハ一ゆ三戸と共ろ。故退ひ来ゆべ退一今也。故退けべる残
ゆえく源五周も障れをゆ。ゆ系ちハいゆ。ゆしやと。鉢形へこて

飯城一ろ一ゆ。ゆハ二万騎の着到ゆ。鉢形へ上ゆハ軍を悪く
義矢ゆて千騎ゆ共ゆ一ゆ一ゆ。

○長尾景春徳所方へ降参の事

長尾系春ハ用ちゆの一戦よ方員ゆ。鉢形よ逃ゆ一ゆ。あよ夜尚ゆ馳向ハ
ゆ一ゆ。彼ゆハ共ゆよ籠城かゆひ。いゆくハせんと大よ怖きゆくえゆれべ。
三戸強ゆる上田ゆ長ゆ領代ゆろ一ゆ。味方ハ一旦の勇武者ゆ。君
敗軍のうハゆやよ扶方へ来ゆべきゆれべ。敵ハ上ゆ敵より多勢ゆべ一。けゆ城此も
元ゆ田入道ゆ築きゆる城ゆまべ要害内ゆ一。ゆ一ゆ。ゆ忽ゆ攻落ゆれハ必定
ゆり。臣ゆ一ゆ一ゆ。思ゆ恩を迎一ゆ。ゆよ。今古河の市郎千葉ゆ仕ゆとゆ一ども。
四郎ゆの時ゆて。輙魚の水よ喘ゆ一ぶて一。ゆ一ゆ。ゆ一ゆ。
勢きゆ一ゆ。ゆの罪科を綻べ。ゆ二の忠を残一。成氏ゆ紙元の如く

操舟巧みなるべきなり。其後は所の田舎方と申すべき者が作り。あと救と我つゝ事に牛角ゆゑ姫路と濃州の霸達よ但さまんよ給のこの如しべき。故の如ぬそのさきよ早くゆゑ給へ使めそる。事去すあるち此計ふ後ひ上田会庫所とをつて使節と。千畳へ遣ハし成氏の近臣簗田中務少輔政時よつきて来あ詞言よおのべる。成氏ハ豊嶋ぶ一後賊軍の後ハ。糸ゆゑと者ゝらまみハせゝがゝ文を奥ハと我と芋尾ぶ軍起りしゝ。給れ一方へ亡び一方ハ弱りあん。其弊よ和て事とあさんと糧系給へ軍士給ゝく。とりゝふ。事去ろう使者給ろく味方よ属ぶんと申しゝ。世義如何ゆゑんと使者給集りて使ぶ。その時法体給翔寿給進ゝて申す。景春私の憤まろう。まと勅きて敬とろゝゝゝ。什拙く才浅給の

太田道灌ふ判場さべきさんゞと一さん大軍を仮事ゝうひふ及べども。一戦よ利伊と失ひ。敗ひ屈して陣形よ遁ろる。是退退谷ふの時ゆゝて。味方へ陣を元のあり。常所ゆも彼ゞ四悪と恩免あり。先ゝ事とゝて上秋ゝ退治ゝのゞ。事去も其ハ愛憐と感ゝて。忠を崇さん事勿論あり。又一つゆハ事去と四一味ゝ同ゝ事のゞ。地あるりのも事ゝうゝん責以味方の為よ大ゝる利ゆて。ゝそゆゝと降る安ゆもゝ。成氏とそゝゞゝこの事の者ども事ゝ外の徒ゝ和も最ゝと同ゝ心ゝて。事去ゞ難ゆ元ゝ。危難の躰も敢へ止ぶゝく。仍ゝて高氣ゆ元あり。見ゝのゝゝゞゝて内加勢ゝゝ遣ハさまんと。仰生ゝさまゝゝゞ。上田三庫所ゝ内ゝて伊おもむき拉ゝ。事去ゝ大ふ脱び廻文ゝさんよ野武蔵の者ども へ解生ゝふ。所所の内石ゝ書へきゝゝれ。又事去ゝよ同ゝのゝゝ生まりて。内も忍ゝ見ゝち生んと。其用ゝとゝそ

ちゝ〜ちゝ。

○両上杉。景春と北武蔵對陣。附り成氏上杉と和平の事

かゝてあと杉の世擘に拔さゞる事を付ゐんと。こゝ上野武蔵の勢を催し。
当田道灌をゝ鎌倉の固めよ殘して。北武蔵の富田四方田をふせ出甲相の
陣を張る。爰に成氏へ加勢の事仰せ上る事なれば。早く〜馳つゝ
上総の千葉へ使を立。彼と同年七月上旬。成氏より結城中務少輔朝那
須修理大夫資房を先陣として。横瀬・梁田佐渡守を始めとして。下総。下
野の軍士数〜の加勢。潮と打入る。其上成氏とゝ。こゝ上杉方の
屋内の命蔦系兄の恵を頼んと。越後の國より二千騎を率して。爰に
馳下り。今世荒巻と打入るまゝ出る。あと杉へ取て。佛敵出加勢
とゝ〜ゝ差千の大軍なるべし。そのゝ蔦系も出勢と行るべ。味方も一〜ん

當所をとりそゝ。上列向井へ〜ゝりてかさなて大勢を催し。合戰おびゝと陣構
〜て向井へとそ引退く。佛敵あと杉と和後あんとの内存の為張て軍戦
好まきゝ。その年も暮て明る巻文明十一年己亥
正月。成氏より鎌倉中勢の補をとりて。あと杉へ使〜て後の部へ呂中で差年
乃國戦を止め。正和後あるべしの事ゝ。あと杉も如何のせんと先道灌を招
き異の見を問るゝ。道灌申〜和後の夏最りて人〜廣義さる事也。
彼よ正和後ゆもみのゝ〜ゝ。こゝ東國巻年の兆ゝとゝ。則
後ゆ由うせんと願る。あと杉よりも也尾張守忠系弧りて後中
上げるべ。ゝりゆも正後武斜ゝ。爰まゝ方へ寺尾上野仮と出後〜て。
あと杉とゝ和平〜のひぬ。ゝ〜ゝ早く人数を引る。合戦を止むべ〜この事
なるまゝ。爰ゝも成ゆへ穏ぜられども是非ゝ〜ゝ拝形へ〜ゝ為陣〜ゝる。

○遠江武州小机軍。附て豊臣加勢敗軍の事

さるほど小沢所管領和平側へ引れべ。扇ヶ谷の定正道灌を以付いて上野の金ヶ野より同月廿四日。河越の城へぞ駆よせる。世よみ武蔵石神井の薬師の時より。終に嘶ます。蔵矢せさるに。岩槻の城は太田道灌重廣へ。太田道灌ゑ世平を賜ひとして。一門家の子多く付き。其勢憤を晴さんと安房国間橋樹郡。小机の城を小机弾正左衛門尉安へ。其二の弟左方まれべと。武蔵さまのみて。九子の婿よ大倉弾正左衛門尉安へ。其二の弟左方まれべと。武蔵乃中路を渡く。歩て出んとする。関を入るまで。宮氏へ渠多るが小勢をもつて。たくさんとまるへ。端城斧を振へよ。と。太田へ道を先陣ゝ。この越を出陣す。小机九子のものどもへ。何前事を聞く。加勢をぞ求めける。

世尾寺三戸弦の事

世尾寺三戸弦の。太田道灌方へ。

りくる条磐郡。二の宮の城へ着陣。小机の後詰せんとて。同年三月十日上杉の先陣。太田道灌勝よ小机の城迫へ寄せりくる。条まへ小机の城勝ぬ。此の者ども。後陣の勢の来ざる事を。太田ゑ後より責ぶべ。中なりも出て。その時兵後より攻ぶ。小勢の入道を付ゝ。其後陣ゝ。排喰よ出て。道灌へ宮氏の勢を待受て。多田と。二の宮の押えへ寄田源八郎氏弦ゝ。世尾寺三戸弦ゝ。世尾寺三戸弦ゝ。勢の来ゝ。内し。勢とたのゝ。鎧を合せ。いそぎ。あの戸ゝ。鎧ひよ道灌ゑ。ゝ。十町ばかり。ゝ。太田ゑ。遠ゝ。馬煙立のぼりて。勢の独来ること。道灌ゑ。今後陣の

太田道灌の未承
同図書助資忠
吉田三郎之盛と
男戒
の図

方より尚つよく馬煙騒〳〵太勢押寄る敵勢、陣形の乱勢をとりたれば後
ろふいてぞ〳〵くいさ。つづき敵兵の寄るふぞわ〳〵んとやる。道灌主あわち
小ぶる所より寄せよとげて長とりたれど齋藤がやりもよ遠つぎ安く後の敵も
見つめるやうに長尾兵が後べよりおりて寄り城兵をうち色んとする
什兵あり道灌家〳〵とえの所へ寄庶〳〵寄まさ〳〵くも此謀略
けるう。加勢するがいろく敵大軍みて味方へふ勢ふうふ。ふん大よ敵〳〵
ぐるし兵をいぐ仕らん。道灌がいろく長く兵用ある者い勢の兵が
よ後〳〵ぞ陣勢ひよ寄〳〵ん事が要こ兵寄兵えようるの寄〳〵い
ぞ多勢を指揮ぐさ士卒一兵あ〳〵ぐ兵ぐ〳〵べ〳〵ぐ我兵へ引我ふ
兵のもし〳〵あるよ俳号〳〵貴公一ぐふあ〳〵我ぐ兵配ふ後ぐ中紙かぐう
ぐあ。あ〳〵先ぐを寄ぐて寄ぐ寄ぐが寄ぐ陣一旬もあ〳〵ぐ切へべ敵大軍兵一撃く

分をとれいか陣を救うんゆも人馬嵩こてその働き自在なるまし。味方ハ本
陣をふ切崩さへ。備孔をて殆動せんぐ〳〵ぐ味ぐ兵ぐ〳〵ぐ。寄ぐる
俳諧ぐ〳〵のるぐ〳〵べ度ぐ兵ぐ〳〵ぐ駆ぐ兵ぐ〳〵ぐ我今戯ぐる俳諧の哥ぐ〳〵ぐ。
ぐ寄ぐ〳〵ぐうけぐ〳〵ぐ〳〵ぐ

小机を先を習のはじめ寄ぐ〳〵いろはにほへとちりぬるを
さへかゝまと寄配ぐ步ふまべ軍ぐまふ陽ぐとぐ〳〵。敵の敵ぐ傾げ道
の袖をゆり合を寄ぐを寄ぐを先ぐの中へぐ一度寄ぐ弛かる寄ぐを寄ぐも士卒ぐ扇ぐ。
敵へわ勢ぞ〳〵つんで計ぐんと寄兵へ南北ぐ弧通ぐ〳〵ぐ進めぐと呼ぐ
ぐ軍卒おの〳〵競ぐ〳〵ぐ道渡ぐとぐ〳〵ぐんとぐのぐと〳〵ぐども寄ぐとぐ〳〵ぐ入道ぐ
機小徐ぐ〳〵ぐ愛ぐ慰ぐる神牛鬼没の良将ぐる多ぐべ敵彼ぐらんとぐされべ魚鱗
小進ぐ。圍ぐまんぐとぐすぐべ鶴翼ぐ〳〵ぐ開ぐき二ぐ度四ぐ度揉合ぐども。兵士一人も

付うものなく。竟に糸まろぶ先陣三戸駿河守が馬乗衝破して糸まろぶが縺本へ乗付うり。道灌大音声に呼方へ既に勝うぞ。敵の者共に目かけそ。只糸まろぶ組やうして。頻に下知加へ給ふ。道灌の馬をのかうり。卯乃死と黄糸まろぶ反しうに。甲に同じ毛の拠形の冑に。紺の靄女乃前立すると猪首に糸まろて。金張まめて仕りうる。技拵梗のさしゐし。茜の陳羽織を着し。黒の紋の七すあまりあくに。燃うをうの厚絵の鞆うけ。二尺一すあり名陣刀乃鞘を水すうら紙真向よりしうぞ。敵も味方も兼てうり。日毎に西紙合せうる朋友紙。青の中まるぶ。名のくぶとてもなりうるかん。出蒙の大将道灌が赤の弁国苗図書助資忠なり。七尾筋に見糸せんといへふ。糸まろぶあ小拵へうる武者共に弱国の糸に井れとしたれうるに。解易しうぞ。白けくええうり。資忠が西紙に組む葉氏者どもと。右の縅を鞨敵拵まふあ

うり。糸まろ紙国に掛けて速散に繁生れ。あのうや七尾も討死とうえうる西黒糸の浮子烏帽子形の賀紙名物毛の弱に糸まろる武者法紙と合せうる弛まりうん事ゆい資忠筋に。直里宮内右馬ぶ助。三郎之盛と中まるのふて。ゆうり。糸まりうとし喚いりうる。糸まろ。糸まろ。糸のかけ隔に。大刀の鞘をのうる。国苗助に突てうる。資忠左のふ。怒て。うるに妨げたのもとのうあ。右義さうべ不侵ぶうる。我が陣刀の鞘とうるまうこと。歩まうるうる一刀とかううへ外共一殺中こ寄歩とと。資忠つこ弛めけて。歩こむ刀ふ之盛へ鞘の塩前切打うん。鞘の刀と接んとすると。大喝一声資忠ぶ切付うる右刀。右国が脇の吹返しうる。るまり方の脱垂まで切りげらまうはる。るうるとうるたまうぶ蔵うる。右国を紅毛りう扇ようけてうりぞく。世るふ糸まろへ虎ぶ紙のぶ後て一町だうう蒲団と法不思議ふまうぶい迫て行く。此時に乗りてお後の部伍悉く孔色立ぶ勢部ふ

下知なしたれど。近く侍へしハ軍にあらざれバ。遠きよりの戦ハ手なれざれば虚しく
見物してぞゐたりける。然るに河越の定正ハ途中にて此合戦を聞と等しく
しく。惣軍を駆りて太田への道を討もらさじと平押に馳せ来りたれバ。今ハたゞひたすら
寄中にて。勝負ハいまだ定まらざりしが。長尾と太田が旗の手へ。三方より寄せかけて
別ちなく入乱るゝ。さながら春風に吹靡く。万字巴のごとく。歩合に鐔音闘の声汗たる
の響きいとすさまじく。景春も囲を得ず道灌も切抜けざれバ。今ハこれまでと戦ひける
に扶修理太夫定正ハ長途を来りし人馬に一息続がせ。本陣に急の注報を告
まつて。景春が備の横合より鯨波をつくりて切てかゝれバ。景春ハ二陣の来らぬを
案じ。道灌を討もらさじとおもひ設けたれど。敵の方より道灌を救ひ来たれバ。力なく
又ども。勝手をしらざれバ。其場へ定正二陣の大軍をうつて挟撃を
へ生ける中にも乱騒しく進みけれど。道灌ハ是をこゝろみるよりも。一陣を崩し

打寄せられたり。汝等精神を励まして。景春が生捕と英士が指揮し八面に
當りて。あたかも長尾が景春の家臣の攻めの為に。四方路にあふれて入乱れたる
者。常にも勇ましく操らひて。某放軍とぞ呼れたる。景春を擒の怒を
なしたが。ひとへにあらぬ覚悟の引返して討死せよと血眼になりて制すれども
逃出る味方にまじらも返し合する者もなかりしかバ。諸軍ハおのおの落失せ。
今ハ景春が手の者だにありにぞ。人数を纏めて落行に敵もそれに
続きざりしかバ。景春ハ辛じて遁れて成氏の陣所へ参上軍の趣を細に言上
なしておちのびける

○道灌武蔵東国に移て。附ハ景春が所々の城没落。並に相州奥三保軍。
海老名本間討死の事。

あくまで長尾景春ハ安念する事なく。千葉自胤を孝胤をも促し。今度の文武

及び現在の岸こゝに不ゐまで出張さと。道灌使ひ人々く倉井図書助源次郎左衛門先陣こゝ。彼せ人勢を向けられべし。後さて上杉定正も出勢と。糸見。者乱小勢なるべし。一戦ゐおよばどして下総へ退陣さと。糸見。者こゝの軍より終に勝事あさはざるゐ。二の官の体よりこゝ大石弾正寺も。始終叶はざるやおりはべ。頃て退陣さらべ。又相模成田ゐ沢うあ派も。敵の勢ざる前より来く為失こゝ。方三方ゑこゝどあり。ふたゝ。代々よりて道灌ゐ向へ。攻出べ。我々べ必勝つ。是丸より上ゐ絶へ雷霆の如く。勇名四方ゐ轟き。彼ゐて其鋒先を軍ゐんこゝ。するものゐく。此時に至りて扇ゐ谷の威権強大ふそなりゐそ。然也ども又糸見ふんと者ゐる者もありて。相模の住人本間近江守資連。海老名左衛門尉秀為甲斐鶴瀬の加藤弥六郎。その外相模西郡ゐるものども一味同心して。関東三係こゝ。ゐ人ゐ相ごり面従をゐりよりて太田道灌ゐ軍ゐ紙幣こゝ。

孤ゐ相山へ出張こゝ陣をゐる。倉井寶井源八郎。太田図書助ゐ二千騎を添く。彼ゐ人彼ゐ独向ひ攻ゐとべし。富谷ゐ烏合蝿聚の狗武者ゐて其ゐ人糧食乏しき故三係ゐ久こゝ籠城さこゝん。ちりあぐゐ必ゐるぐゐ海ん出べゐ。能こゝ教仰こゝて遣ゐこゝ。扨又本間海老名加藤弥六郎曾我兄弟こゝ。軍後こゝゐ。扨本間図書連ゐ同道渋谷村山まで来向こゝ。先をとりて当城を攻おとこんとゐるはあり。居ゐ上ゐ敵の勢のとるを待て。隙ざるゐこゝゐ。ふ仰ゐべこゝ。半途まで出て出敵の結ゐるを責かゐべ。後れ出ん必定なり。何如何とゐもんべ。加藤弥六郎ゐ同ゐ計策こゝ。ゐ勢をとりてゐ出ゐるこゝ。大軍ふ囲まるこゝ。ゐ秘策なるべし。すで要害ゐるて堅く守る。然ゐ彼ゐ又ゐ伏兵ゐ後けて我ゐ。敵ゐ素内と云こゝざるゐ。其ゐ勝事もあべし。手ゐ中ゐ内ゐ糸見こゝ。援兵ゐ向けらまゐん卑竟ゐ以前ゐ如ゐあり。

とやきとあり。衆議両端にわかれて一決せず。其とき海老名秀貞進み出て。各のいふ所いづれも理あり。されど今度の将軍へ向ての備へなる方ともよし。本間後は中途に出てたゝかふべし。又手勢をわけてこれを助けん。加藤後は又後にありて城を守りあらんと云ひけるに。皆々此儀然るべしとて同年十月廿四日先陣は本間近江守資連五百余人。二陣は海老名左衛門尉秀益三百余人。逆寄に責来る。太田は兼て人を許りて出し置き。敵の動静を窺はせる間早くも此由注進す。図書助は源六郎に向ひて。敵二手にわかれて押来るとあり。某先手にあたりてたゝかひを始むべし。二陣は足下請取て切るべしなりといふなり。兎も角も致さんと云ひて打出けるが。両陣揃ひなく行逢ひけり。図書助資忠は桔梗の旗を先にまくり弓の者に下知をつくして雨のふるがごとく射出しける。本間が方は射立てられ少しひるむ矢面に進み出る兵士

もろくと射出されけるよりも。楯の蔭に伏隠れて進みえざりし。大将資連士卒を勇めて只逃散に寄せ込めと呼はり真先に馳出でしを是に気を得て手の者の勇士等先に進みて。太田資忠は弓の者をたばかりに十人ばかり膝車よろしく待居る所に本間が類る武者無二無三に入来るを構へて馬の足を狙ひ突かせければ。あまりに堪りかねて落ち重なりてあへなく落ちて太刀に混乱なさしめて。時分はよしと資忠は決死を振ひ。精士一同に押し掛り責めかゝりける。本間が軍士も是に八方へ乱れて。又一所にまとまりつまりえずして資連も無念ながら逃る味方に引かるゝ。敗軍となりて退きける。太田資忠本間が跡を慕ひて追ひ立て。資忠が方をとりまきければ。二陣の海老名秀益も合戦の最中にて。いまだ勝敗わかれざるに追ひ掛り挑みまじへ。太田は本間を追ひ捨てて。秀益が旗本より二手に別れて討ってかゝる。此時において海老名が列伍

什樸法よ突くらつくを召率一度よ死を志我かんとする者もあく。我先ふと
落失まべこれよりて太田。独田一人も道さごと退付する事忽あれど。
秀益も不くみく敗て退く。味方と助けて防戦さ。本間近江守資運も仏
合戦い我が仕出ちく事なまべ。虎口ぬのぎて後よ面を向くべきこと兵一弱
引退く。秀益とお垂んで退いまる敵を支ぐ。先切よりの戦ひふ源を海
ぬい崇ぬ。仏ハ鬼神と大事ども。苦多合孫めもたのくされべ。あく共よ
孔軍の中ふ付ぬ。太田兄弟ハ敵将をえぐりとくて。兵士笑く付ぬうを
勇を煩び備を堅めて。敵も笑と強くれ。あんとする如よ。道灌も村山
とう押来る。軍の始終を笑く。物姫よよくとあくを祈。直よ敵城へ攻め
ぬまべ。加藤弥七郎我一人ゆて絶体なるひぐく。密よ城の後より落失べく。
已が住居鶴河へ引ぬく。道灌早く見を恐ぐ。後をちくふて甲斐の国を

越え。弥七郎が要害みく。此所ハ山聳谷深く。巌石左右よ峙ちく。
殊更不紀案内の地也なるべ。敵の多くぬ。太田ハ力攻めいかりぬ。近通
と放火しく。軍士紀孤り武蔵へ凱陣ちくなる。

道灌泉武巡見附り小日向金剛寺。市谷八幡宮の事。

里の事

備ふ方面道灌ハ世間少時無事なまべ。けちどの戦労を慰し。就て在土ハ
巡き所を巡見しく。用ふの為よすんと。佳くとり見て。ハ石川の方へ向ふ
ぬ。樹木蔭森なる山の半腹ハ暮りて黄ふ一ツの草菴あり。制らな
拉仔の頭巾よ関伽汲をさして。其傍ハ野菊苔ど打へ生て。いと殊勝
なるさるるれべ。道灌菴の内ぬ入まべ。齢半百ぬ過ぎる僧の俗よもあらく
坐しく居るが。道灌と見て。とハ如ありひろげぎもかくるを菴よ至りのひるよ

と。席をちかくして請じて。濃茶をたてゝもてなしけれバ。道灌も暁起し言語
頭陀仏具の義を述られけり。其名ハ問ふに用山和尚の世の乱を避て閑居の
躰なりしかバ。道灌兼てより和尚の徳を知りて居けれバ。一寺造立の事を約し。
其後日ならずして精舎就ぬ。山をあまひと号け寺を金剛とよび。数十口の
僧徒を置て。二六時中の修行怠らず。めでたき国家の冥福をぞ祈りける。
ある日又乾の方へ出て市谷へ至るに小高き岡あり。巨松歳経りて緑を重
塁外の地勢繁を離し佳境なれバ。道灌しばらく馬をとゞめて四方を望へ。
左右の人に云へるハ我かし頃鎌倉の八幡宮を江戸に勧請して擁護を祈ん
とおもひ居るに。まさしく其地を得たり。幸此所にとて神祇鎮座の霊場となし
さて。馬上甲冑の尊影を神躰とし。本社拝殿をはじめ瑞籬に至るまで悉く
成就し。常磐堅磐に弥栄えまします神徳を仰ぎ。東円寺を別当所となん

さだめらる。又今井の庄赤坂に当郡の一の宮氷川明神を祀りし社あり。往古の
巨呂故の岡といひし名由。道灌先年当社奉納の和歌をもとめられしに。残
花雪といふ題にて。
老らくの身をつもりてやむさしのゝ冬のまゝにて残るしら雪
と詠じて奉りしも名高し。此日も社参奉幣ありて帰られける。道灌ある
時城より北の方高田富塚に猟し給ふに。其日ハ獲物も若干ありて。大に興じ
給ひし。是より雑司関口の方を猟んとて。近習の者少く具して根河原へぞ
むかひける。列卒の輩競ひすゝみて。東西へ走り南北へ別れ叢に隠れたる
麋猪狐兎を狩出すを。道灌も笑壺に入らせ給ひて見給ふに。折から弥生の空
の曇りき。忽ち雲おこり。東風一陣吹すぎて。雨もおびたゞしく降出しける。
あたりに人家も無りければ。君臣共に濡つゝ。ある一の家のほとりに至らるゝに

沓掛ハ一ツの門に立寄て案内し。太田入道どの狩せんとてゆきかゝりしが。かゝる村
雨にあひ給ひぬ。調度の菓子其ハあらで雨具を貸せ給へと声ふくぞかけ給ふ。
せわりて内より十三四ばかりのなまめかしき女の立出。衣の袖つきそろへども。すまゐ
ゐるみどりの黒髪の丈もたゞちもうるはしく。容居するまゝひねもすすゞに諸しとも
えんえんげなりしが。いと盛りなる山吹の花をさすまで咲そめたるを一枝手折て。
跪きてさし出しけるが。顔うちそむけておもはゆげなり。道灌其心を知らず名
主の意を知らず。いとあやしく此所を出れば。あたかも腕に霜て日影も殊に暮なりて。
雨ふりて物うき道を消ゆるさらぬとも今日の旅の意女が事。今まかり
しかれば中村治部少輔重頼ハ京家の人なりけるにより。こと是を語るに重頼すなはち
感じ称歎して止ぬ。道灌其古歌を問へば重頼が曰 古歌に。
七重八重花ハ咲けども山吹の実の一つだになきぞかなしき

とあれバ雨具なしとてなげかるゝのハあらねども。みのひとつだになきといへる心にて蓑一つ
だに無き事を。わびしく思ひなる心を山吹一枝に千ゞの心をこめて出しける事
さるも尋常の人ならずバ。かくハ志べき。入道のかへりて後にこれを聞きけれバ
なるべし。そもいかなる者ぞ。世にあらざる者にや。惜しむべきハ其の人も又いかゞし給ひし
ことハ女のみくだりたるよと申しけれバ道灌も殊に感じ入りしとぞ。
按ずるに世の常談に。太田道灌ハ田に猟して急なる雨にあひ。とある貧家に
立よりて雨具借んといひしに。少女の山吹の花を手折てさし出す。道灌其
故を知らず。さる者も其の意を知らず。此児女子唖なるべしとて怒りて帰りしと
ふたゝび後に中村重頼に語るに。古歌を引て雨具なきをいひしなりといひ
たゞちに感じ。道灌ハ向ひて武にのみ長じて鬼神不測の妙を得たれども
しかれども歌道に疎きの徳ハ知りながら。却て此小女にも劣れる事を恥て

是非かしこくて歎息しるを。道灌ふかく悲慨しこと堪へず。問ひて哥を学ばん。後に名哥おほくこゝに出でゝ普く人口に膾炙する如しと。さまでに道灌は初稚より勤学を怠らざりき。十一歳の頃は詩文雅の作あり。殊に父の道真入道は哥人なり。ことさらおよぶの時勅撰の所あり。その外細川勝元へ仕へて遣はしたる哥人のうち。紀貫之の長歌合せなど。道灌の家集は碧玉數起。又暮景集などあり。山吹の古歌へ。

後拾遺集ふ

小倉の家に住侍りけるころ雨ふりきる日ごとにかゝる人の侍りけるに山ぶきの枝を折りてこゝろもえさく侍りけるのみさきにて又花は山吹のそこにえさりしよりいひおこせて侍りける返事にいひつかはしける

七重八重花はさけども山吹のみのひとつだになきぞかなしき

と色をかへずとあるに道灌申給ふ彼歌の女乃山吹の枝をけしをるあや。又花を道灌に附贈しをる。山吹の古乃歌乃をもひ出でゝ後の人に伝へ侍る。

こゝろあや加ゆ色をかへぬ。今山吹の里乃四季は関にゆる新まゝ者人生るなん。

問神玉よりの側ふあり。

豊明親王

太田道灌雄飛録巻之五終